

【講演】「図書館をまちのたからものにするには」

(内野)

では、よろしくお願ひいたします。岡崎さんが図書館に興味のない人間だとおっしゃっていましたが、私は図書館を知らない人間でした。図書館を知ったのは、図書館に異動になった40歳からでありまして、とってお金のある町に生まれたんですけれども、なぜか市立図書館ができたのが、僕が29歳の時。学校図書館も大学も、ほとんど使わずにやってきたものですから、考えてみると、ずっと僕はよそ者みたいな感じで図書館にいました。なぜよそ者かといいますと、図書館の関係者は時々、ちょっとこういうきつい表現をします。あの方行政から来た人よと。あんたも行政職員だろよと（会場笑）。なぜか行政から来た人といわれます。私は資格がなかったの、あの人資格がない行政から来た人よ。そしてこの係長さんは2年もすると、あつまんなかったと本庁に帰るのだろうと。僕は帰りませんでした。知らなかったの、知りたかったんです。知りたいから大学院に行きました。知りたいから図書館を巡り歩きました。そしていつのまにか塩尻から来てくれないかとなりました。図書館でよそ者、塩尻でもよそ者でした。そして今もよそ者みたいな感じなんですけども。

なぜよそ者かといいますと、これまでのやり方、いわれてきた価値観というものではないのじゃないですか、ということをおそらくいつてきたからではないかと思ひます。これは塩尻（スライド。長野県の地図）、どんなところか分からない方もいらっしゃると思うので、ここです。300k㎡くらいの大きな市域を持てていて、私が50歳で、図書館の建設の指揮をとってくれといつてきた、塩尻市民交流センターというところが。延べ床面積が12,000㎡、そのうち市立図書館が3,300㎡、そして目的は中心市街地の活性化、いろんな意味を含んだ活性化であります。

ちょっとだけ自己紹介をさせていただきますと、先ほどいつ行政から来た人間でありますので、図書館のキャリアよりも、本庁の他部署のキャリアの方が長いです。企画や人事や広報といつた、そういったところの方が図書館よりも長くおりました。それから、商工観光課へ行きたい、商工の支援やりたいと思つておられて、中小企業診断士の資格も取るために、予備校に通つていた時期もあります。実は商店街オタクでありまして、何でこの商店街、こんなにさびれてしまったんだといつたところには、比較的関心を持てています。そういうキャリアで図書館に入つてきました。

それからもう1つ。今申し上げたように40歳で図書館に異動になり、43歳で図書館情報大学の大学院に入った。そして修士論文は「公共図書館と出版流通のあり方」。なぜこのテーマを選んだかといいますと、1990年代頃からいわれ始めました、図書館は無料貸本屋じゃないのか、という揶揄された表現に、どうして？どうして身内からそんなことをいわれなければならないんだと思ひ、大学院に入れば何か答えが見つかるんじゃないかと思つて進んだわけです。今日壇上にいらっしゃる永田先生にも、ご指導を頂戴しています。そういうことがあつたので、実は図書館員の倫理綱領、「図書館員は読者の立場に立つて、出版文化の発展に寄与するようつとめる」、この一文が僕にはとんでもなく大きなミッションになりました。ところが、図書館の現場の方々とお話をしていると、ちょっと申し訳ないんですがこの言葉が出てこない。本当に出版文化って考へているのだろうか。これは日本図書館協会が、出したもので、読者の立場に立つて出版物の流通に積極的に対処する社会的責任を持つ。とあるわけですから、当然これを自分がもし仮に、新しく図書館を立ち上げる機会に巡り合えたとしたら、やつてみたいという気持ちでおりました。

そして塩尻に来ました。市長にこういうことをいいました。貸出点数の多寡に拘泥しない図書館をつくりますと。私のように外様の館長は、どこでも爆発的に貸出を伸ばすみたいなところは少くないです。私は貸出点数を増やすことを図書館のミッションにはしたくない。図書館を利用者のためのものから、市民のためのものにしたい。なぜならば、全国の多くの図書館、実際の図書館を利用されている方は、2割とか3割程度しかございません。できるだけ多くの市民の方に利用してもらいたい。だから貸出点数を増やすということよりも、利用者登録を増やしたいということを、市長に申し上げました。

それから、市民というのはもちろん塩尻市民でありますけども、広域圏の住民というものを、最初から利用者としてターゲットにしたい。そうじゃないと限界があります。塩尻だけの住民のために、利用者登録を増やすといっても。そういったところからまず職員の方をお願いをしたことがあります。

実はですね、ちょっとこれから僕がお話することを、何だよ自慢話かよという風にきかれました。そんなつもりでいうつもりはないです。これもやめましょう、あれもやめましょうということはたくさんあったんですけども、それを全部やってしまうと。僕がそれまで見てきた図書館、その頃は200館ちょっと超えていました。今は500館超えています。よくあるんです。「なぜこういう棚をつくったのですか?」「前館長が決めたので」とか、「なんでこんなことをやっているのですか?」「前館長が決めたので」。そうじゃない、皆さんが決めたことでしょ、という風に落とさなければならぬ。といっても新館のオープンはどんどん近づいてまいりますから、これだけはやらせてくださいと、ちょっと厳しかったかもしれません。

8つの分館の購入している雑誌が非常にかぶっている。貸出を伸ばしたいから。でも貸出を伸ばすことは図書館の目的ではありません。もっとたくさん市民に提供するんですと。それから、ベストセラーの複本、この購入を抑制をしましょうと。これも申し訳ないんですけどもお願いしました。それと、近隣の図書館との蔵書の差別化というものも、徹底してやっていきましょうと。これはなぜかという、今は松本に丸善があるんですけども、僕が着任したころは丸善がなかったもので、今僕が東京で目に見える、丸善やジュンク堂や紀伊國屋書店に並んでいる発行部数の少ない本は、ほとんど松本には入ってきていません。俗にいう学術書や専門書といったものです。本当になかなか見る機会がありません。そういったものを見せるのは、もちろんそれは書店の責任ではないと僕は思います。書店は商売であります。売れない本をたくさん置くということが、僕はミッションにはなりえないと。だからこれは公共の仕事でしょうと。という風な話もして、図書館の関係者の方も多いのでわかると思いますけども、白水社の文庫クセジュ、あんまり読む人いませんよね。いいシリーズなんですけども。書店にも置いてませんね。これなんかは全点買いでいこうよと。それから日経ビジネス人文庫。これも書店さんにはほとんど置いていないです。長野県内の図書館にもほとんど置いていないです。これは全点買いでいこうよと。こういったことを職員に話しながらやっていきました。

それから地域資料の収集です。県内の同人誌、大学の研究紀要等も積極的に収集しました。ということは、どちらかという貸出は伸びない、ということを取って設定したんです。いいじゃないかと。しかし、結果は伸びました。結果的には伸びたんです。貸出は一見伸びなくなってしまうと思うかもしれませんが、そうではありません。

こんな変化がありました(スライド「相互貸借件数の推移」2007～2017年のグラフ)。相互貸借。水色が他の地域に塩尻が貸出した点数です。濃い青が借り受けです。えんぱ一くがオープンした2010年、図書館が閉まっていた期間がありましたから、ちょっと減っていますけども、えんぱ一くができる

前は当然借りる方が多い。えんぱーくがオープンしました。人口は変わっていません。相変わらず6万7,000人の小さなまちです。ところが、あーっという間に貸出が増えました。多種多様な資料を集めるということが、こういう風に顕著な数字になって現れました。

実は今までも、図書館が書店さんをつぶしているんじゃないか、出版社をつぶしているんじゃないか、そういう議論がたくさんされてきました。私はそれが知りたくて大学院に入りました。そして、ずっとそれを研究してきました。これは、2010年を100とした場合、2017年の現状ということで、長野県の中信地方があります。塩尻を含めた4つの市が中信地方になります。そこの出版年間販売額、どう変わったか。ここは、あえて名前を伏せています。塩尻は89.5。減っています。でも全国の出版物の販売率は84.1です。ところが、A市(79.4)、B市(78.1)、C市(61.0)は非常に厳しい状況になっています。

これで図書館の存在を認めて欲しいと主張するものではありません。ただ、データはデータとしてあります。ただなかにはね、非常に厳しい経営に陥ってしまった書店さんがあることも把握はしています。

さて、サステナビリティのお話ですが(スライド「平成27年5月「県と市町村との協議の場」説明資料」)、これは市の基本計画の目指す都市像というところで、平成27年につくられた資料なんですけども、これ総合計画です。塩尻市のポテンシャルというものがあります。ここに、「塩尻市のポテンシャル(潜在力)」というところで、えんぱーくが入っています。僕は役所の企画課にいたことがあるので、実はこれはすごいことなんです。ここに図書館が入るって。普通は入ってきません、ここには。ちゃんとまちを動かす1つの大きな潜在能力を持っているところとして、認められているということですね。

これは『KURA』という月刊誌の増刊号ですね。信州塩尻という増刊号なんですけども、今年の3月に出たものです。市長が言っています。「『人づくりから始まる地域づくりの拠点』」ということで1番最初に手掛けた仕事として、えんぱーくがあります。現在、えんぱーくには年間60万人を超える人が来ていただいています。正確にはほとんど70万人近いです。ちなみに6万7,000人の町です。都会ですと人と知が集まる場所として当たり前であり、当たり前が人が集うのですが、わたくしもさまざまな施設を視察してゆきましたが、えんぱーくのように駅の近くにあり、お子さんから高齢者まで気軽に来られる場所は、明らかに地方都市における1つの都市ブランドの成功例だと思います。市長が都市ブランドという言葉を使うまでにいたりしました。私が最初塩尻に行ったとき、「塩尻は、内野さん、ワインのまちなんです。漆器のまちなんです」と教えていただきました。最近あちこちの講演先でいわれます。

「内野さん、塩尻って図書館のまちなんですね」。これが大きく変わったところで、市長も認めています。ワインより先にえんぱーくが出ちゃいました。

『図書館雑誌』という雑誌があります。これはちょっと自分の本で申し訳ないんですけども、『図書館からのメッセージ』という本を私が出しまして、その書評として書かれたものです。僕が書いたわけではありません。ちょうど真ん中あたりですね。「本書の中から、塩尻市民の嶋田嘉一郎氏の言葉をここで挙げておこう。「図書館のありがたさを、本とか知識とかじゃなくって、私はもうちょっと広い意味で人間を知る場所に利用してくれたら、と思っています。」「図書館とは人間を知る場所」だという図書館の本質を市民が見抜き、市民自身が広く語ってらっしゃることに驚かされる。これは、地域の図書館が市民の間に根づき、市民のための図書館となっていることの証明であろう」ということを、レビュー

一で書いてくれた方がいらっしやいます。

実はですね、この話を受けたときにちょっと悩みました。私は初代館長。今は4代目の館長です。現館長が話した方が良くないだろうなと思ったんですけども、ちょっといろいろ考えて、登壇させていただくことにしました。というのは、毎年5~6通くらい、ある市民の方から定期的に手紙が届きます。『市民タイムス』という地元紙、中信地域に広く購読者を持っている地元紙がありまして、ここにえんぱーくの記事が載ると必ずそれを送ってくれます。そしてお手紙があります。最後に必ずあります。「図書館は進化しています。えんぱーくは進化しています」そして「内野さんに感謝」。必ずこの感謝っていう言葉をつけてくれます。ならば、多少はそのDNAをまくことができたのではないかな。ならば登壇させてもらってもいいかな、と思って登壇した次第です。

さて、よく図書館の関係者はいいです。予算がないんです。うちの町お金がないんです。そうでしょうか。平成29年度の予算。図書購入費。塩尻は2,784万円。鹿嶋は700万。ちなみに財政力指数は、塩尻は0.71。鹿嶋は相当貧乏なんでしょう。違いますよ。0.98です。鹿嶋は超お金持ちですよ。かつては1を超えていました。一時は1.34くらいまでいきました。ものすごいお金を持っているまちです。なのに何で鹿嶋が700万、何で塩尻が3,000万もお金があるんだ。お金があるかないかではないですね。図書館をどうやって為政者、要は首長のもとに届けるかです。危機はなかったのか。ありました。ものすごい危機がありました。拙著にも書いたことがあります。3,000万だった資料費が、僕がいたとき2,000万にする、といわれました。どこの役所でもある話です。そして仕方なく領いて、あーあまた切られちゃった、というのがどこの役所でもそうでしょう。ここは、よそ者の強みです。私は1,000万削らないでくれということで、復活要求をしました。1,000万復活しろなんてね、外様じゃなかったらできないですよ。なぜならば、ずーっと仲良く仕事をしてきた財政課長、飲み友達の総務部長。彼らが頭絞ってつくった予算の内示にケチつけるんですからね。ふざけるな、私はできませんっていうて、市長にはっきりとできませんと。そのとき市長が、良い市長ですね。内野さんできないっていつてるからなんとかしてあげたらと、市長が軽くいいます。市長はそういうとこ即決なのですね。わからないから(会場笑)。部長と課長は大変ですよ。どうすりゃいいんだろうこれから。いわれました。何人かの職員にははっきりと。市民だって職員だって、みんなが図書館が大きくなればいいなんて思ってたねえからな、といわれたことがあります。

「信州しおじり本の寺子屋」という図書館事業があります。「本の学校」のこれは図書館版でありまして、本の学校というのは、鳥取県の米子市に今井書店というのがありまして、米子につくった、書店員さんの学校ですね、民間の。これを図書館版として何とかやりたいと僕はずっと思っていました。そこにやって来たのが、河出書房新社の元編集長です。私どもは大した時間もかからずに、お互いにインスパイアしたといえますか、やりましょう、やってみましょうという話になりました。何をやるか。出版社の方々は、図書館員とは人脈が違います。たくさんの作家さんに知り合いがいます。「じゃあ僕が連絡すれば何とかなるという方いっぱいいるよ。そういう方を塩尻に連れてくればいいんじゃない。そして塩尻は場所を提供してくればいいよ」ということで、信じられないくらい安いお金でこれできました。目的は修士論文の延長線上にあります。本の学校はずっと研究のテーマにしていました。そして、地元の書店、出版社との連携、そして出版文化を守ることが図書館の矜持である、ということ職員と意識を共有しながらやってきたつもりです。

これが本の寺子屋ですね(スライド。本の寺子屋の写真)。その本の寺子屋を1つの本にまとめたも

のがこれです（『本の寺子屋』が地方を創る』という書籍の画像）。ご覧になっている方がいらっしゃるかもしれませんが、これの非常に面白いのは、市が少し関わっています。製本費として100万円計上しました。歳入として、印税として72万円入ってきました。要は自治体が本づくりに関わる。これが全国に出回る。読んだ方が塩尻に行ってみたいと思う。そうやって稼げる図書館が生まれてくる。そういったことのこれは1つの実践例であります。

こんなこともありました（スライド。左側に「韓・日出版文化フォーラム」のポスター。右側に韓国語で書かれた文書）。本の寺子屋の話が韓国に飛びました。韓国で日本の出版を研究されている研究者が、非常に面白い。しかも6万7,000人という小さな自治体で、なぜこんなことができるのか。ということで20人を超える学者を中心とした方々が、塩尻に来られました。海を越えたんですね。海を越えて、塩尻は何をやっているんだ、なぜできるんだということで、お話をさせていただく機会をいただきました。こちらの右側は韓国語で書かれた報告書です。

公共図書館の変化。これはまあ公共図書館の方は分かっていると思います。例えば1997～2017年を追っていくと、1館あたりの資料費予算は59%まで落ち込んでいます。もうほとんど半分になっちゃっている。専任職員数は66%。ここも厳しい。個人の貸出点数。これは大きく伸びてはいますけども、1館あたりの貸出点数でいうと、この10年ほとんど変わりません。

こういう状況になっている中で、図書館のサステナビリティをどんな風にやっていけばいいのかとなったときに、これは『市民タイムス』、中信地域で非常に読まれている新聞ですね（スライド『市民タイムス』の記事。「市図書館 貸出数が最多に」）。こんな感じで、地元紙があると図書館をたくさん扱ってくれます。そして、ここにも書いてあるんですけども、塩尻は1人あたりの貸出点数が9.97ということで、長野県内の19の市では断トツであるということを書かれています。おかしいでしょ。貸出を伸ばさない。貸出にならないような本を収集する。しかし、結果的にいうと貸出は伸びるんですよ。単純にいうと、本が届いていないのです、読者に。だから図書館が、本を届けるっていう仕事をしなければならぬんです。貸出を伸ばすっていうことは悪いことではないんです。ただ多種多様な本を、図書館は届ける必要はあるだろうと僕は思います。

そこで、結論めいたことをお話すると、図書館が進化をし続けるには、まずは為政者の理解、首長の理解が必要です。図書館員は、はっきりいってここが弱いんです。私が企画課から図書館に異動になった時に、図書館のやっていることが企画課にすら届いていないのです。何でこれを届けてくれないの、企画に。財政もいうでしょう。何で財政に届けてくれないの。図書館はものすごいポテンシャルを持っているんですよ。分かっていたら何とかできるのっていうことですよ。

で、館長は図書館を変革するのではなくて、図書館員を変革しなければならないと、僕は思っています。館長が図書館を変革してしまうと、続きません。あれはみんな前の館長がやったことです、私たちは何にも聞いていません。これではいけません。図書館員がちゃんと自分たちがやったんです。ですから、こんな例が塩尻にはあります。僕が塩尻に着任したときに、1つだけ、これだけ買って欲しいんだ。出版関係の逐次刊行物が塩尻は買っていなかった。『出版月報』を買いましょうよと。『出版月報』を入れてもらいました。『出版月報』を置いている図書館は、長野県内でもほとんどないです。僕が退職しました。退職してから、僕は何にも塩尻に対して指導はしていません。僕が退職してから、塩尻は『出版ニュース』もちゃんと買うようになりました。『新文化』も買うようになりました。ちゃんと図書館員が変革しているんですよ。私たちがやります。だから傑出した館長は要りません。全員が矜持を

持つこと。

そして、図書館員はまちに出ることです。まちに絶対出なければ図書館員はダメです。当たり前のことです。社会教育施設ですから。(車の画像がスライドに映る。) あ、これで終わりですね (会場笑)。お話ししたいことではあるんですけどもね。これ全然塩尻に関係ない写真じゃないですよ。実は塩尻にもものすごく関係があるんです。でも時間が来ましたので、終わりにします。

(永田)

ありがとうございます。その話は後程またうかがえればということで。ではここで休憩にいたします。ロビーの方にペットボトルのお茶の用意もごさいますので、どうぞくつろいでいただければと存じます。また、お二方のお話に対してのご質問については、質問用紙がごさいますので、それにご記入いただいて、私どもにお預けいただくと、後半の進行がスムーズにいくかと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。それでは、30分まで20分弱の休憩です。
